

第廿二講 神の殿（みや）

詩篇第一三三篇、使徒行傳第二章一節～十三節、

ヨハネ
約翰傳第十五章一節～八節、および以弗所書第四章一節～十六節参照（九月廿五日）

羅馬書の研究を繼續して第四章に入る前に當つて、尚ほ豫備として述べたき一事がある、それは「神の殿」なる問題についてである、之は今夏中に反復考察せし問題の一であるが、今まで之について誤解し居たることに自ら氣が附いたのである、又人々も多く此事について正しき理解をして居らぬことを發見した、哥林多前書三章十六、十七節を見るに左の如く記してある。

汝等は神の殿にして神の靈（みたま）なんぢらの中に在（いま）すことを知らざるか、もし人神の殿を毀（こ）たば神かれを毀（こ）たん、
そは神の殿は聖きものなればなり。

茲に「神の殿」なる句が三度用ひられて居る、普通の見方はこれを個々の信者と見るのである、基督者は衷（うち）に聖靈を宿するものである故神の宿り給ふ所即ち「神の殿」である、故に「聖きもの」である、されば此聖き神の殿即ち基督者を毀つ者は必ず神の毀つ所となる、手を以て造れる神殿は是れ決して神の住み給ふ所でない、「至高（いとたか）き神は手にて造れる所に居給はず」（使七の四八）とある、今や神の靈おのおのの基督者に宿りて各自が一人々々「神の殿」である、此意味に於て我等各々は聖く、貴く、永久的の値ある者である、人よ基督者を毀つ勿れ、基督者よ自らを重んじて汚す勿れと、これパウロの意味であるとなすのが普通である。

然るに此兩節を精讀して見ると右の見方の少しく誤れることに氣づくのである、そしてそれが僅かの誤りの如くであつて實は大なる誤りである事を知るのである、日本語には名詞に單複の區別なきため此點不明であるが、原文聖書又は英譯聖書に依れば「汝等」と云ふ主語は複數であるのに「殿」と云ふ客語は單數である、即ち十六節には *ye are a temple of God* とあり、十七節の最後には *which temple ye are* と記されてゐる、之に依て汝等の一人々々が各々の殿であると云ふのではなく、汝等凡てで一の殿を形造つてゐると云ふのである、即ち基督者の或一團（此場合に於てはコリントの教會）が聖靈の宿る所であつて、換言すれば一の「神の殿」であると云ふのである、此事を知らざるかとコリントの信者に云ひたるパウロは、今もし我等の間にありとせば我等に對しても同様に斯く云ふであらう、實に汝等は一の神の殿なることを知らざるかである、既に充分に知り居るべき筈の此道理を知らざるかである。

葡萄樹の枝は其樹を離るれば枯死する、人體の各肢體（目、耳、手、足、指等）は其體を離るれば死滅する、枝たるもの、肢體たるものは生きんためには是非共其本體に繋がり居らねばならぬ、聖靈は團體の上に降る、兄弟姉妹の集合せる處に神の殿は成り立つ、故に聖靈を受けんためには此の神の殿の一部と成らなくてはならぬ、そして神の殿にありて共に聖靈の滋雨に浴さねばならぬ、神の殿を離れては本體より切り放されし肢體の如く死滅する外はない、是非とも兄弟姉妹と共に一團となりて其中にありて聖靈の雨を浴びねばならぬのである。

此事を裏書きするものとして我等は詩篇百三十三篇を引用し度いのである。

- (1) 視よはらから相睦みて共に居るは、いかに善く如何に樂しきかな、
- (2) 首かうぶに注がれたる貴きあぶら鬚

に流れ、アロンの鬚に流れ、その衣の裾にまで流れ滴るが如く、(3) またヘルモンの露くだりてシオンの山に流るゝが如し、そはエホバかしこに福祉をくだし、限りなき生命を與へ給へり。

是れ實に簡潔にして優美なる詩として最も代表的な者である、第一節は兄弟姉妹の美しき團居を述べしものであつて、如何に獨立を愛重する者にも此の一節の貴さは充分に感知せられるのである、第二節は我等日本人には少しく奇怪なる形容の如く見ゆるけれども、鬚々として垂るゝ美はしき鬚を有するシエム人の間にありては如何に良き形容として感ぜられたことであらう、アロンの首に注ぎたる貴き香膏がこの鬚に流れ下り、それより垂れて衣に及び、更に衣を流れくだりて遂に其裾に及ぶと云ふのである、これ聖靈の降る様を譬へたのである、第三節上半はヘルモン山に流れ注ぐ瀧の如き雨が遂に乾けるシオンの山をまで潤ほすの意であつて、これ亦聖靈のくだる有様を描いたのである、アロンは祭司長の就任式に於てモーセより其首に香膏を注がれた、「モーセ……又灌膏をアロンの首に注ぎ之に膏をそゝぎて聖別めたり」(利未記八の十二)とあり、それよりさきモーセはエホバより「灌膏をとりて之を彼(アロン)の首に傾け灌ぐべし」(出埃及記二九の七)と命ぜられてある、溢るゝばかり注がれし香油は衣の裾にまで流れ下るのである、北の方ヘルセンは露しげき山である、傳へ聞くスリヤの夜には強雨多く、殊にヘルモン山には豪雨瀧の如く降りて雪と共に流れ下ると云ふ、南の方シオンは乾ける地に立つ乾ける山である、その缺く所は露なるが故に望む所も亦露である、あり餘るヘルモンの露はシオンの山をまで潤ほすのである、アロンの首に灌がれし膏の如くヘルモン山に降りし露の如く、聖靈は流れくだりて會衆の上に止まるのである、されば其處に福祉があり限りなき生命がある、第三節後半「そはエホバかしこに(其集會の

上に) 福祉をくだし、限りなき生命をさへ與へ給へり」とあるは之である。

されば此歌は神の靈あぶらの如く又露の如く上より降りて一團の會衆の上に臨む有様を描いたのである、聖靈は膏である、聖靈は露である、魂の傷を醫し魂の渴きを潤ほす、その會衆の上に降る有様を美はしく描きたる此の歌は、「神の殿」を歌へる歌として最も優れしものであると云はねばならぬ。

次に此問題について見るべきは使徒行傳第二章の有名なるペンテコステの記事である。

- (1) ペンテコステの日に至りて弟子たち皆心を合せて一處に在りしに
- (2) 俄に天より迅しき風の如き響ありて彼等が坐する所の室に充てり、
- (3) 焰の如きもの現はれ岐れて彼等各人の上に止まる、
- (4) 茲に於て彼等はみな聖靈に満たされ、其聖靈の言はしむるに従ひて異なる諸國の方言を言ひ始めたなり。

茲に代表的なる聖靈降下の叙述がある、この問題について最有名なる此箇處は第三節に於て明記さるゝ如く「焰の如きもの現はれ分れて、岐れて彼等各人の上に止まる」と云ふ、即ち聖靈は初から別々に一人一人の上に降つたのではなくして先づ焰の如き一つのものとして現はれそれが岐れて各人の上に止まつたのである、「岐れて」は意譯である、改譯聖書に「火の如きもの舌のやうに現はれ」とあるは原意に忠ならんと力めたのであらうが不正確な譯である、「恰も火の分れし舌の如く」とでも譯すべきであらう、即ち一の火がありてそれより幾つかの舌が出でて其一つ一つの舌が各人一人一人の上に止まつたと云ふのである、火は一としてくだる、そして幾つもの舌を出して各人の上に止まる、これ使徒行傳第二章に記さるゝ聖靈降下の姿である。

聖靈を受くることは基督者として最も大切な事である、此事なくしては如何に聖書を熟讀反覆するも、如何

に萬卷の註解書を讀破するも、如何にグreek、ヘブライの原語を精究するも心靈上には些の效果がない、否却て心靈を毒するのみである、不消化の知識は今や日本人を苦しめつゝある、知識を山の如く貯へて而かも人生の方向に迷ひつゝある人の如何に多き、殊に聖書の研究に於ては聖靈を伴はざる知識は有害無益である、「人聖靈に感ぜざればイエスを主と謂ふ能はず」(哥前十二の三)とある、我等は聖靈を受けて基督者となり得、又聖靈を受けて信仰生活の維持進展をなし得るのである、聖靈を受くるのは信仰的生涯の最必要事である。

然らば如何にして聖靈を受けんか、これ問題である、密室の熱烈なる祈り、獨り山中に分け入りて谷川の調べと鳥の歌に合せて献げらるゝ靜かなる祈り、それも貴くもあり又必要でもある、併し之のみにては聖靈の恩賜に與る事は出来ない、之のみに訴ふるは甚だ不充分である、前にも説明せし通り、神の靈は「神の殿」に下る、集會の上に膏と露と焰とは下る、そして之が會衆の上に岐れて下るのである、過去に於て聖靈は概ね斯くの如くにして降つた、故に今に於ても然り又將來に於ても然るであらう、集會の必要、祈祷會の必要、共に福音を學び共に父に祈るの必要は茲に於てか起るのである、孤立は大なる禍である、聖靈の下賜を妨ぐることである、我等は相つらなり相結びて全體に於て一の「神の殿」を形造り、此殿の上に一として降る聖靈を各自が分與せらるゝやう努めねばならぬ、それが余輩の長年唱へ來りし無教會主義に背かざるか如何は別の問題である、それが如何であつても聖靈降下の道は過去の事實に訴へて明かである、會衆相結びて一の「神の殿」を造りそして各自が神の靈を受くべきである。

聖靈は團體の上にくだるを常則とする、その良き例は我等の此の安息日毎の會合である、安息日の十時より此

集合が開かるゝや神は我等を憐み給ふて、我等の祈に應じて此處に其靈を降し給ふ、故に一種の言ひがたき靈氣が此處に漲みなぎる、人々は此堂を動かす一種の靈氣を呼吸せんとして斯く多く集ひ來るのである。

全世界に神のエクレージャは唯一つある、神は之を殿みやとして其内に宿り給ふ、而して人は何人も此エクレーシャに聯つらなりてのみ聖靈の恩賜に與ることが出来る、其意味に於て「靈は一つ、主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ」である、又其意味に於て舊き教會の唱道に誤りはない、曰く「教會以外に救済あるなし」と、然し乍ら孰れが眞の教會なる乎、其れが問題である、而して教會は天國の如くに「此所ここに見よ彼所かしこに見よ」と言ひて指定し得るものではない、教會は靈的實在者である、故に靈的にのみ其實在を認むる事が出来る、人は聖靈を受けざればイエスを主と稱びまつる事が出来ないやうに、聖靈を受けざれば信者又は教會の眞偽を判別する事は出来ない、神の靈に由つてのみ神の事を知る事が出来る、俗人にも不信者にも認むる事の出来るやうな其んな教會は今の世にも存在し得ないのである、其んな教會を建設しやうと欲おもふが故に多くの偽はりの教會が成立して人を偽はり世を欺くのである、目に見ゆる眞の教會はキリストが再臨し給ふ時に成立する、其時までは成立しない、然し今は眼に見えないが存在する事は確實である、而して信者は今は眼に見えざる主を仰ぎつゝ眼に見えざるエクレーシャに聯つらなりて其信仰的生活を営むのである、然り眼には見えないが畧おほぼ知る事が出来る、眞まことの信者は相會して畧おほぼ相互に其眞の兄弟姉妹なる事を知る、未だ完成されざる此世にありて誤察は免かれ難い、肉に在りて信者と雖も今鏡をもて見る如く見る所昏然おぼろである、然れど彼の時には面を對あはせて相見するのである（コリント前十四章十二）、信者は大衆である、而して一團である、其事は確實たしかである、其中に偽信者は居らないとは限らない、稗子わいしは麥と共に收

獲の世の末まで存在するであらうとの事である、然れども其事あるに係はらず神は此暗き世の内に彼の選^えび給へるエクレシヤを有^あち給ふ、而して人は之に加はりてのみ神が人に賜^{たま}ふ最大の恩賜^{たまもの}なる聖靈を頂^うく事が出来る、茲^{こゝ}に眞^{まこと}正^{ただ}の聖徒^{せいと}の交際^{まじはり}がある、一つの靈の分賜に與^あるが故に信者は眞^{まこと}に兄弟姉妹である。

第廿二講 神の殿

詩篇第二三篇、使徒行傳第二章一節～十三節、

約翰(ヨハネ)傳第十五章一節～八節、および以弗所(エペソ)書第四章一節～十六節参照 現代語訳

見方が少し誤っていることに気づく。そして、それが単なるわずかな違いではなく、実は大きな誤りであると分かる。日本語では名詞の単数・複数の区別がないためこの点が不明確だが、原文の聖書や英語訳聖書によれば、「あなたがた」という主語は複数形であるのに対して、「神の宮」という述語は単数形になっている。つまり十六節には *ye are a temple of God* とあり、十七節の終わりには *which temple ye are* と記されている。これによって分かるのは、あなたがたの一人ひとりがそれぞれ一つの神の宮だと言っているのではなく、あなたがた全員で一つの神の宮を形づくっていると言っているのだということだ。つまり、キリスト者の集まり（この場合はコリントの教会）こそが聖霊のお住まいになる場所であり、言い換えれば一つの「神の宮」なのだというのである。このことを知らないのかとコリントの信者たちに言ったパウロは、もし今私たちの間にいるとしたら、私たちに對しても同様にこう言うだろう。「あなたがたは全体で一つの神の宮であることを知らないのか」と。すでに当然知っているはずのこの道理を、まだ知らないのかということだ。

ブドウの木の枝は、その木から離れれば枯れて死ぬ。人間の体の各部位（目、耳、手、足、指など）は、体から

離れば死んでしまう。枝であり、体の部位であるものは、生きるためにはどうしても本体につながっていないければならない。聖霊は集団の上に下る。兄弟姉妹が集まる場所に神の宮は成り立つのだ。したがって、聖霊を受けるためには、この神の宮の一部とならなければならない。そして神の宮にあつて、共に聖霊の恵みの雨を浴びなければならぬ。神の宮を離れてしまつては、本体から切り離された体の一部のように死んでしまうほかはない。どうしても兄弟姉妹と共に一つの群れとなり、その中で聖霊の雨を浴びなければならないのだ。

このことを裏付けるものとして、私たちは詩篇百三十三篇を引用したい。

(1) 見よ。なんとという幸せ なんとという楽しさだろう。兄弟たちが一つになつて ともに生きることが。(2)

それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。(3) それ

はまたヘルモンからシオンの山々に降りる露のようだ。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

これは実に簡潔で美しい詩として、代表的なものだ。第一節は兄弟姉妹の美しい集いを述べたものであつて、どんなに独立を重んじる者であっても、この一節の尊さは十分に実感できるだろう。第二節は私たち日本人には少し奇妙な表現に見えるが、豊かに垂れ下がる美しいヒゲを持つセム系の人々の間では、どれほど素晴らしい表現として感じられたことだろうか。アロンの頭に注がれた尊い香油がこのヒゲに流れ落ち、そこから垂れて衣に達し、さらに衣を流れ下つてついにその裾にまで達するというのが、これは聖霊が下る様子を例えたものだ。第三節の前半は、ヘルモン山に降り注ぐ滝のような雨が、ついに乾いたシオンの山までも潤すという意味であり、

これもまた聖霊が下る様子を描いたものだ。アロンは大祭司の就任式において、モーセからその頭に香油を注がれた。「注ぎの油をアロンの頭に注いだ。こうして彼に油注ぎを行い、彼を聖別した」（レビ記八章十二節）とあり、それより前にモーセはエホバから「注ぎの油を取って彼の頭に注ぎ、彼に油注ぎをする」（出エジプト記二九章七節）と命じられている。あふれるほど注がれた香油は、衣の裾にまで流れ下る。北の方にあるヘルモンは露の多い山だ。伝え聞くところでは、シリアの夜は激しい雨が多く、特にヘルモン山には豪雨が滝のように降って雪と共に流れ下ると言う。南の方にあるシオンは、乾いた地に立つ乾いた山だ。不足しているものが露であるため、望むものもまた露なのだ。余るほどあるヘルモンの露は、シオンの山までも潤す。アロンの頭に注がれた油のように、またヘルモン山に下った露のように、聖霊は流れ下って集会の上に留まるのだ。だからこそ、そこに恵みがあり、永遠の命があるのだ。第三節の後半にある「主がそこにお命じになった。祝福を、永遠のいのちを。」（その集会の上に恵みを下し、限らない命さえお与えになった）というのは、このことだ。

ですからこの歌は、神の霊が油のように、また露のように上から降りてきて、一つの群れとなった集会の上に臨む様子を描いたものだ。聖霊は油であり、聖霊は露である。魂の傷をいやし、魂の渴きを潤す。その集会の上を下る様子を美しく描いたこの歌は、「神の宮」を歌った歌として最も優れていると言わなければならない。

次にこの問題について見るべきなのは、使徒の働き二章の有名なペンテコステの記事である。

- (1) 五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。
- (2) すると天から、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。
- (3) また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとり

の上にとどまった。(4)すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させるとおりに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

ここに代表的な聖霊降下の記述がある。この問題について最も有名なこの箇所では、第三節に明確に記されているように「炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった」と言っている。つまり聖霊は、最初から別々に一人ひとりの上に下ったのではなく、まず炎のような一つのものとして現れ、それが分かれて各人の上に留まったのだ。「分かれて」は意訳だ。従来の改訳聖書に「火のごときものが舌のようになって現れ」とあるのは、原意に忠実であろうと努力したのだろうが、不正確な翻訳だ。「あたかも火の分かれた舌のように」とでも訳すべきだろう。つまり、一つの火があつて、そこからいくつかの舌が突き出し、その一つひとつの舌が各人一人ひとりの上に留まったということだ。火は一つとして下る。そしていくつもの舌を出して各人の上に留まるのだ。これが使徒の働き二章に記されている聖霊降下の姿である。

聖霊を受けることは、キリスト者として最も重要なことだ。このことがなければ、どれほど聖書を熟読し繰り返し返しても、どれほど多くの解説書を読み破つても、どれほどギリシア語やヘブル語の原文を精密に研究しても、霊的には何の効果もない。それどころか、かえって霊的な害毒となるだけだ。消化不良の知識は、いま日本人を苦しめている。知識を山のように蓄えながら、人生の方向に迷っている人がどれほど多いことだろうか。特に聖書の研究においては、聖霊を伴わない知識は有害無益だ。「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」(コリント人への手紙第一 十二章三節)とある。私たちは聖霊を受けてキリスト者と

なることができ、また聖霊を受けて信仰生活を維持し、前進させることができるのだ。聖霊を受けることは、信仰生活において最も必要なことである。

それでは、どのようにして聖霊を受ければよいのだろうか。これが問題だ。自分の部屋での熱心な祈り、一人山奥に入って谷川のせせらぎや鳥の歌声に合わせて捧げる静かな祈り、それも尊く、また必要なことだ。しかし、これだけでは聖霊の恵みを受けることはできない。これだけに頼るのは甚だ不十分だ。前にも説明した通り、神の霊は「神の宮」に下る。集会の上に油と露と炎は下るのだ。そしてこれが集まった人々の上に分かれて下る。過去において聖霊はおおむねこのようにして降った。だから現在においてもそうであり、将来においてもそうだろう。集会の必要性、祈り会の必要性、共に福音を学び、共に父なる神に祈ることの必要性は、ここから生じるのだ。孤立することは大きな災いだ。聖霊が与えられるのを妨げることだ。私たちは互いにつながり合い、結びついて、全体として一つの「神の宮」を形づくり、この宮の上に一つとして下る聖霊を、それぞれが分けていただけのような努めなければならない。それが、私が長年主張してきた無教会主義に反しないかどうかは別の問題だ。それがいづれにせよ、聖霊降下のあり方は過去の事実から見て明らかだ。集う人々が互いに結びついて一つの「神の宮」を造り、そうして各自が神の霊を受けるべきなのだ。

聖霊は集団の上に下るのを原則とする。その良い例が、私たちのこの安息ごとの集まりだ。安息日の十時からこの集会が開かれるやいなや、神は私たちを憐れんでくださり、私たちの祈りに応えてここにその霊を下してく

ださる。そのため、言葉には言い表せないある種の霊的な気がここに満ちあふれる。人々はこの建物を動かす一種の霊的な気を吸い込もうとして、このように多く集まって来るのだ。

全世界に神のエクレシア（教会・集い）は唯一つ存在する。神はこれを宮としてその内にお住まいになる。そして人は誰であっても、このエクレシアにつながることによつてのみ、聖霊の恵みにあずかることができるのだ。その意味において「御霊は一つ、主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」である。またその意味において、古い教会が主張してきた「教会の外に救いなし」という教えに誤りはない。しかしながら、どれが真の教会なのか、それが問題なのだ。そして教会は、天国と同じように「ここを見よ、あそこを見よ」と言つて指し示せるようなものではない。教会は霊的な実在だ。したがつて、霊的にしかその実在を認識することはできない。人が聖霊を受けなければイエスを主と呼ぶことができないように、聖霊を受けなければ信者や教会の真偽を判別することはできない。神の霊によつてのみ、神の事柄を知ることができるのだ。世俗の人や不信者にも認識できるように、そんな教会は今の世には存在し得ない。そのような教会を建てようとするからこそ、多くの偽りの教会が成立して人を偽り、世をあざむくのだ。目に見える真の教会は、キリストが再びおいでになるときに成立する。そのときまでは成立しない。しかし今は目に見えなくても、存在することは確実だ。そして信者は、いまは目に見えない主を仰ぎ見ながら、目に見えないエクレシアにつながつてその信仰生活を営むのだ。そうだ、目には見えないが、おおよそ知ることにはできる。真の信者は互いに会つて、おおもね相手が本当の兄弟姉妹であることを知る。まだ完成されていないこの世においては、見誤ることも避けられない。肉体にある間は、信者であっても今

は鏡で見るようにぼんやりとしか見えない。しかしその時には、顔と顔を合わせて互いに見るのだ（コリント人への手紙第一 十三章十二節）。信者は大勢であり、そして一つの群れだ。そのことは確実である。その中に偽りの信者が混ざっていないとは限らない。毒麦は麦と共に収穫の世の終わりまで存在するだろうということだ。けれどもそのことがあってもなお、神はこの暗い世の中に、ご自身のお選びになったエクレシアを所有しておられる。そして人はこれに加わることによってのみ、神が人にお与えになる最大の賜物である聖霊をいただくことができるのだ。ここに本当の聖徒の交わりがある。一つの霊を分けていただくからこそ、信者は真に兄弟姉妹なのである。